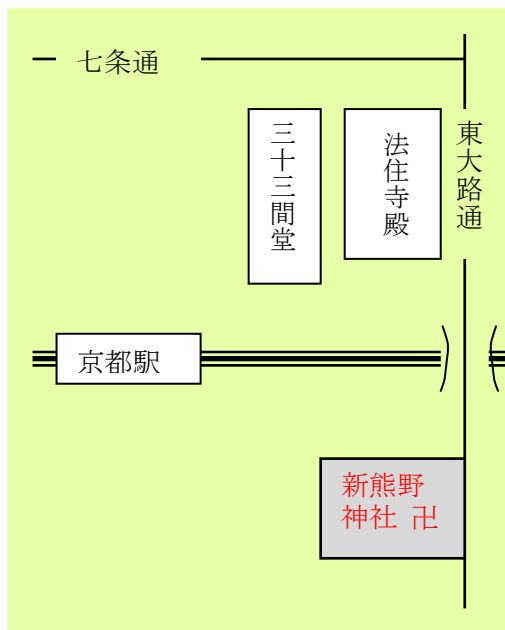


訪れる人は少ないが、東大路七条の交差点から南へ400m、東海道(新幹)線を越えた所に^{いまくまの}新熊野神社が鎮座しています。(近年では「今熊野」と表すのが通例)名前が示すように、この社は那智熊野神社を勧請して分霊したもので、法住寺殿の鎮守とされています。



1374年には、当社で歴史的な出来事がありました。それは、**室町幕府三代将軍足利義満**が初めて能を観たということです。その時に舞いを披露した演者とは、**観阿弥**と^{ぜあみ}世阿弥(1363~1443)の親子でした。そして、子供ながらも神々しいまでに美しい世阿弥に、義満は心を奪われてしまったのです。この日以降というもの世阿弥を寵愛し、手厚く庇護することになりました。つまり、将軍が大スポンサーとなったわけです。

歴史的なという意味では、この一件は世阿弥一人だけにとどまらず、観阿弥が率いる一座(結崎座、後の観世座)は勿論、大和(奈良県)にあった多くの能(猿楽、^{さる}申楽とも呼ぶ)の一座に対して、下記のように画期的な影響を与えたということが挙げられます。

- ① 従来は寺社への奉仕が経済的基盤であったが、上級の武家や公家の支援を受け始めた。
- ② 法要や神事のために奉納する演能から、支援者のために見せる芸能に変化し始めた。

つまり、多くの猿楽座が寺社から自立を始め、芸能プロダクション化したようなものです。その当時、大和の^{えんまい}円満井座(後の^{こんぼる}金春座)が興福寺春日神社に、^{さかど}坂戸座(後の^{こんごう}金剛座)は法隆寺に奉仕をしており、^{とび}外山座(後の^{ほうしょう}宝生座)及び結崎座(観世座)を合わせ「大和四座」と呼ばれます。彼ら芸能者は賤しい身分と見なされておりまして、寺社に隷属する形で生計を立てていました。ですから、遅れて大和で旗揚げした結崎座などは、より厳しい境遇にあったと思われます。

一方、桁外れの豪華華美・珍奇さを好み、「^{ぼさら}婆娑羅大名」と呼ばれた^{ささきどうよ}佐々木道誉は例外ですが、ほとんどの公家や武家は芸能者を敬遠したのが実情で、ましてや将軍たる者が関心を示すとか、直接に支援することなどは通常では考えられないことでした。

であれば、なぜ義満が能を観たのかと申しますと、これは観阿弥の活躍が大きいと思います。観阿弥は自身も優れた能役者でしたが、結崎座の座長でもあり、さらにプロデューサーとしても有能であったようです。つまり、多くの寺社から仕事を取る才能も秀でていた。そして或る時、大和ではなく京都の醍醐寺で演能する機会を得たわけです。その時の評判が大変良かったので、側近を通じて義満の耳にも届いたようです。それが、新熊野での催しの前年のことでした。

観阿弥は京都進出を狙っていたようでもあります。ともかくも幸運な機会——平たく言えば絶好の売り込みチャンス——をつかんだわけです。実際、義満が満足するような演目を用意し、役柄をアレンジしたのは事実です。そして、結果は予想以上の評価となりました。

幼くして時代の寵児になった世阿弥ですが、その生涯は山あり谷ありであったと言えますね。因みに、彼の略年譜から主だった出来事を拾いますと、下記のようになります。

1374年(11歳)	新熊野神社にて父観阿弥と共に能を舞い、足利義満が鑑賞した。	
1375年(12歳)	公家の中心人物・二条良基と出会う。「藤若」という幼名を賜る。	
1378年(15歳)	義満の棧敷に招かれ、祇園会(祇園祭)を見物する。	
1381年(18歳)	義満との仲介役であった南阿弥が死去。	} ……苦闘・試練の時期
1384年(21歳)	父観阿弥が死去。結崎座の長となる。	
1388年(25歳)	二条良基が死去。	
1392年(29歳)	南北朝の統一。	
1394年(31歳)	義満が將軍職を子の義持に譲る。(但し、大御所として実権は握る)	
1399年(36歳)	京都における猿楽興行が大きな評判を呼ぶ。	
1406年(43歳)	最初の能楽論伝書『 ^{ふうしかでん} 風姿花伝』を執筆完了か? ……盛りの絶頂期	
1408年(45歳)	3月、義満の北山第(現在の金閣寺)にて後小松天皇が猿楽を鑑賞。 5月、義満が死去(51歳)。→ 義持が実権を握る。 義持は田楽能の名手・増阿弥を最肩にする。 ……冷遇の始まり?	
1422年(59歳)	出家。観世太夫の職を後継者(子の元雅)に譲ったか?	
1429年(66歳)	足利義教が將軍となる。義教は音阿弥(世阿弥の甥)を寵愛する。	
1432年(69歳)	元雅が死去。	
1434年(71歳)	佐渡へ流罪となる。(以降の消息は定かではないが、80歳で死去)	

一見して、義満の存在(支援)が大きかったことが分かります。その影響で貴人層(上級の公家や武家)との交流も深まり、とりわけ二条良基は義満以上に世阿弥に惚れ込んだようです。世阿弥は舞いの他に連歌の才能も発揮したようで、連歌会にも必ず呼ばれるほどでした。史料によれば、貴人層から得られる一興行当たりの収入は寺社のそれと比べて4~5倍にもなったらしいので、結崎座をはじめ多くの猿楽座の財政にも、かなりの余裕が生まれたであろうと想像できます。

さて、年譜では義満没後に世阿弥への冷遇が始まったとしましたが、近年の研究成果によって異説も存在しています。それは、世阿弥の影が薄くなったのは芸風が好まれなくなったため、義持や義教による冷酷な仕打ちとは単純に見なせない、というものです。さらに、元雅ではなく音阿弥こそが世阿弥の後継者であり、彼を厚遇した義教の態度は、むしろ理に叶うとされます。これに従えば、世阿弥の佐渡への流罪も疑わしいということになります。

晩年の世阿弥は主役の座を譲ったものの、数多くの伝書(能楽論書)を執筆しています。生涯では17部、不遇の時期にも13部(佐渡流罪中にも1部)を残したそうです。目的は後継者の育成で、究極的には、滑稽な物真似芸に近い猿楽を高い次元の芸能として飛躍させることであります。

世阿弥の伝書は能について書かれたものでありますが、後年には禅宗の影響も見られますし、貴人層との交流によって得られた和歌・連歌・書・絵画といった幅広い文芸面の要素、さらには近江猿楽の特徴である「幽玄(=明るい美しさ)」も取り入れた、奥深いものになっております。

風 姿花伝…『花伝書』とも呼ばれますが、世阿弥の思想を最もよく表した総論的な伝書で、絶頂期に数年間かけて執筆したものです。観阿弥の考えを継承したと述べていますが、記述は実際の・実践的です。確かに現在と比べるとまだまだ洗練されていない面はあるものの、指摘は今日の能楽にも通用するものです。世阿弥は役者であると同時に、優れた脚本家・演出家でもありました。伝書は全部で七篇から成り、おおよその内容は下記の通りです。

- 第一 年来稽古条々（七歳・一二三歳・十七八歳など、各年齢に応じた稽古のあり方）
- 第二 ^{ものまね}物学条々（女・老人・物狂い・法師・鬼・神など、各役に扮する演技の方法）
- 第三 問答条々（座敷・夜の演能・序破急など、実際の上演についての一問一答）
- 第四 神儀云（神事としての能の由来…神代の発祥や秦氏出自との記述あり）
- 第五 奥義云（芸能人の生き方…「花」を極める）
- 第六 ^{かしゆ}花修云（能の創作と本質）
- 第七 別紙口伝

世阿弥は、よく「**花**」という言葉を使います。平易に言えば、役者が持てる技量を最大限に発揮した心身状態のことで、観客が面白さ・珍しさ・驚き、そして幸福を感じるものを指しています。一時的な、目に映る華やかさを本物だと誤解するのは、最も気をつけるべき落とし穴だと警告し、「まことの花」を強調しています。一時的な流行りで有頂天になり、稽古を怠って墮落する役者が増えたことが、『風姿花伝』を書く動機になったわけです。風姿とは先人の遺した姿・形を指し、その優れた「花」を伝えていくためのものなので『風姿花伝』と名付けたと記しています。

もう一点、「**初心**」という言葉もキーワードです。これは初心者だけに該当するものではなく、年齢に応じ、役柄に応じて、新たな段階(次元)を目指す場合には、その瞬間こそが「初心」であるというわけです。ですから、「初心」の重要性は何度も訪れますし、技芸の練磨に励む者にとっては常に「初心」状態であると言っても過言ではありません。これは相当に厳しい姿勢ですね。

世阿弥は観客というものを常に念頭に置いています。「**能は観客があつてはじめて成り立つ**」と言い切り、観客におもねることなく観客を喜ばせ、且つ評価されることを最も重視しています。例えば、世阿弥は徹底的に義満の期待に応えようとしてしました。義満にはそれが嬉しかったのだと思います。だから、あれほどまでに寵愛したのではないのでしょうか。言い過ぎかも知れませんが、世阿弥は上手に義満を籠絡したのだと思います。世阿弥はそれが出来る現実主義者でした。

天河神社(奈良県吉野町)には元雅が舞った際の面が蔵されています。かつて、そこを訪れた、能について一家言を持つ白洲正子女史も言っておられますが、「お能は何か中心が無くて、周りの一つ一つ全てが中心であるかのような、すべすべした、丸い珠玉のようなもの」かも知れません。能というものは舞いは勿論、地唄も鼓や笛の音曲も全てが重要な構成要素です。どれか一つをとっても「花」たる資格が与えられています。が、前面に押し出る愚は避けなければなりません。

「秘すれば花なり。秘せずば花なるべからず。」（『風姿花伝』第五奥義云）

どうやら、「まことの花」は、本当の目利きでないと見分けることが難しいようであります。